
受験生だけど恋をした

西野了

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

受験生だけど恋をした

【Nコード】

N6152Y

【作者名】

西野了

【あらすじ】

高校3年生の僕は、運悪く文化祭実行委員に選ばれてしまう。そこで君に出会い、受験生なのに恋に落ちてしまう……………

文化祭実行委員会（前書き）

文化祭実行委員会

面倒なことが嫌いな僕が文化祭の実行委員になったのは、くじ運が悪かったからだ。各クラスから最低二名は実行委員を選出しなければならなかったが、大学進学を目指している僕には、そんなことは関係のないことだった。

だが僕は昔からくじ運が悪かった。案の定くじ引きをすると、ピンポイントで当たってしまった。二つ隣のクラスの君もどうやら僕と同じように、くじ運が悪かったようだ。

僕が会場係になったのは、企画とか会計とかややこしい係から逃げるためだった。だけど君は文字を書いたり絵を描いたりするのが上手くて、そのために無理やり会場係をやらされてしまった。それぞれの会場を表示するためには、上手い字を書ける人が必要だったし、ポスターや立て看板をデザインする人も求められていた。

でも僕たち二人の仕事は雑用係みたいなもので、いろんな係の人間から指示されると、それに従って動くだけだ。メイン会場の体育館は企画部とか実行委員長とかが嬉しそうに仕切っているし、僕らの仕事は囲碁とか将棋とか地域経済研究部（本当にそんな部があったのだ！）とかのマイナーな文化部の会場の設営と管理だけだった。（一応各文化部の企画運営には責任は負っているけど、ほとんどやることはない）

僕と君は三年生になるまで、話をしたことは一度もなかったと思う。同じ学年だから顔を見たことはあるけど、接点はまったく言っていないほどなかった。だから二人で会場係になったときは、正直戸惑った。それは君も同じだったのだろう。お互い何をどうしてよいかわからず、なんて話したらよいかもわからなかった。

だけど同じ作業をしていくうちに、君が意外と悪戯好きでしかも芯が強く、とても素敵な笑顔を持っていることに気づいた。だから最初は嫌々文化祭の仕事をしていた僕が、文化祭準備を嬉しそう

にするようになった。もちろん他の奴らには気づかれないうようにしただけ。

それから会議では同じ係なので当然のように君は僕の隣に座る。そのとき僕は僕の心臓の鼓動の音を聴く。そして君が僕の隣に座っていることを確かめると、僕は幸せな気分になる。幸せ？ そう、いつも乾いて冷たい風が吹いていた僕の胸が、満ち足りることが本当にあったのだ。いくら模擬テストでよい点をとったとしてもこんな気持ちにはならない。そして鈍感な僕は気づいた。隣に座っている女の子は僕の胸を満たすものを持っていることを。

文化祭実行委員会という会議は、はっきり言ってつまらない。

最初に決めなければいけないのは、いわゆるテーマというやつだ。「仲間」だとか「夢」だとか「今、このとき！」だとか定番の言葉をこねくり回して、適当につなげあわせる不毛の作業をする。

交通安全の標語じゃないけど、ほとんどの人間がそんな言葉は気にしてないっていうか無関心だと思う。だけど委員長の大野や副委員長の小杉、企画部長の藤本たちは真面目に考えているようで、「あーだ、こーだ」とか言って騒いでいる。（奴らは下手くそなバンドを組んでいる）

当然僕はしらけて退屈で指の上でシャーペンを回していた。すると隣に座っていた君はつぶらな瞳を少し見開き、嬉しそうに微笑んだ。君は僕の左に座っていたので、右の瞳だけが少し大きくなったように見えた。右の口元も少しだけ上がって悪戯っぽく笑ったようだった。そして君の瞳は茶色く透き通っていて僕はとても驚いた。

僕や僕の友だちの目はどんよりと濁っているけど君の瞳は違う。僕は世の中には普通の目の人間と瞳を宿している人間の二種類が存在することを遅ればせながら発見した。そして君の澄んだ瞳で見る世界はきつと誰よりも美しく見えるではないかと想像するのだ。

全体の討論が終了すると、それぞれの専門部の打ち合わせに移った。だけど会場係は僕と君の二人きりで、この係は大体雑用係みた

いなものだからそんなに話し合うことなどない、というかほとんどない。僕は生徒会室の隅っこの方で目立たないように向き合ってた。二人しかいないけど会場係の責任者の僕は、何を話そうかと思案していた。そのときの僕はかなり困った表情をしていたのだろ。

「ねえ河村君、シャーペンをクルクル回すの、上手いね」（河村真一が僕の名前だ）

君はやわらかな前髪をかき上げながら、悪戯っぽく訊いてきた。

「秋山さん（秋山葵が君の名前だ）もつまらなかったの？ さっきの会議」

僕は秘密を打ち明けるように、声をひそめて訊き返した。君はやわらかいピンクの下唇を軽く噛んで、素早くあたりを見回した。そして少し顔を歪めて僕と同じように声をひそめて答えた。

「私、形式的なことって苦手なの。テーマとかスローガンとか、どうでもいいのにね」

僕はその言葉に驚き感心した。色が白くてほっそりと見える君は、おとなしくて従順そうなイメージだったけど、それは女の子に無知な僕の勝手な思い込みだった。（いったい世界のどこに「おとなしくて、従順な少年そして少女」がいるのだろう！）

「河村君、会場の下見ということでの部屋から抜け出さない？」

君は何か悪だくみをしている少年のような表情を浮かべて囁いた。「グットアイディア！」

僕はもちろん同意した。

僕たちがこそそと部屋を出て行こうとすると、委員長の大野が陰険な眼差しで「どこに行くんだ？」と呼び止めた。僕たちは会場係としていろんな場所を下見しておかなければならないと、もっともらしい理由をつけて部屋をあとにした。

僕らはアリのバイ的に体育館に向かった。現時点で体育館に行っても当然何もすることない。だけど生徒会室でほかの人間というより、

君と二人でここにいる方がずっと心が弾む。

黄色い西陽が差し込む体育館には、剣道部員の竹刀を打ち込む音やバスケット部員の変なかなり声が聞こえる。僕らは体育館に入るわけでもなく、渡り廊下で壁に背をもたれてぼんやりと佇んでいた。「毎年、文化祭のとき体育館でバンドのライブがあるけど、河村君は聴いたことある？」

君は西陽が眩しいのか、目を細めながら訊く。

「いや、去年も一昨年も聴かなかった」

「へえー、やっぱり、そうなんだあ」

「やっぱりってどういうこと？」

僕は君の言葉に内心少し驚いたが平静さを装った。

「だって河村君ってそんなタイプじゃない気がする」

「えっ、俺って、どんなタイプ？」僕はなぜか嬉しくなっただけで訊き返した。

「自分の部屋で、クラシックのCDとかを一人でじっくり聴いている……バツハとかベートーヴェンとかね」

「それってネクラでオタクっぽいつてこと？」

僕の言葉に君は慌てて右手を振った。ピンクの頬も少し赤くなっている。

「違う！ 違う！ そんなんじゃないで、河村君って落ち着いてるっていうか、大人っぽいつていうか、そういうことだよ」

僕も慌てて助け舟を出した。

「じゃあ、秋山さんはどんな音楽が好き？ 文化祭のライブは聴いたの？」

「ライブは友達が行こうつていうから付き合ってたけど、二回とも途中で出ちゃった。だって最初の方はよかったけど、後の方は下手だしうるさいだけだったもん」

君は瞳に例の悪戯っぽい色を浮かべ、ペロツと可愛い舌を出した。

「っていうか私、あまりロックとか激しい音楽わかんない」

「じゃあクラシックとかジャズとかがいいのかな」

「うーん、音楽の授業でときどきクラシック聴かされるでしょ。そのとき私、よく眠っちゃったりするんだ」

「それはその音楽が気持ちいいから眠くなるんだよ」

「えーっ、そうなの」

「退屈な場合も寝ちゃうけど」

「うーっ、どっちなのよ？」

君は笑いながら上目遣いで僕を睨む真似をした。

僕は君の仕草を見て、自分の胸の鼓動がやけに大きく聞こえた。

そして女の子はいろんな種類の笑顔をもっていることを発見した。

それは高校のテキストにも参考書にもどこにも載っていない、複雑で素敵なことだった。

想定外の出来事

文化祭の準備は僕の想定外の仕事が多々ある。広告取りもそのひとつだ。文化祭のパンフレットの後半のページにいろんな店の広告が載っているが、その広告取りもしなければならなかった。（つまり広告料をとるということだ）

「大体いつも同じ店とか会社が広告を載せてくれますが、今は大変な不景気なので厳しいところもあるかと思います。だから新規開拓も含めて、与えられたノルマはきっちり守るように！」

会計担当のクールで美しい宮田遙が、珍しくモーレッツ営業課長のような情け容赦ない視線を全員に投げかけた。

委員長の大野も「お前ら、文化実行委員会は遊びじゃねーぞ！ちゃんと仕事しろよ」と高圧的に叫んでいる。

「ノルマ達成するまで返ってくるなあ！」

奴はそう言つて僕の方をあざ笑うかのように見下した。彼の隣にいた小杉たちも「河村あ、お前大丈夫かなあ」とヘラヘラ笑っている。すると大野が「バーカ。お前らもノルマ達成しなきゃ帰ってくんない！」と居丈高に言った。小杉は驚いて、それから露骨に嫌そうな表情を見せた。どうやら小杉たちは自分たちが重要な役（？）についているので広告取りを免除されると思っていたらしい。

それにしても大野はやけに僕にからむような気がするが、僕は無視することになっている。僕はああいった目立ちたがりで、それでいて妙なところで細かい人間は嫌いなのだ。

もともと、無愛想で口下手な僕は、こんなことを上手く処理することはできそうになかった。だから不安でいっぱいだった。幸いそれぞれの係単位で営業？するので、僕は君に頼らざるを得なかった。かなり憂鬱な僕と比べて君はなんだか嬉しそうだっただ。

だがその疑問はすぐに解けた。君の少し困ったような顔で頼まれると、どの店もあっさりと広告掲載を了承した。僕は啞然とした表

情で君の後を付いて行くだけだった。僕たち二人はその日のうちにノルマを達成した。いや正確には君がすべてをやったのだけだ。

そのことで僕は少し落ち込んでしまったのだと思う。やはり会場係責任者としての変なプライドが傷ついたからだ。

「河村君、今日はもう仕事が終わったから、あそこに寄っていいかな？」

君の指差した場所にはミスタードーナツがあった。実は僕はドーナツが好きなのだ。ときどき食べ過ぎて妹にバカにされたりするのだが。

カウンターで僕はオールドファッションとホットコーヒー、君はフレンチクルーラとホットレモンティを注文した。そのとき店長のような若い女の人が君に声をかけた。

「葵ちゃん、彼氏？」

君は「えへへへっ」と笑った。

僕たちはテーブルに向かい合って座ると、それぞれのドーナツを一口齧り温かいコーヒーとレモンティを飲んだ。

「河村君、オールドファッション選ぶの、なかなか通だね。私もそれ好きなんだ」

僕は食べかけのオールドファッションを半分に割り、僕が口をつけていない方を君の皿に置いた。君は「エッ」と驚き、目を細め本当に嬉しそうな微笑みを僕に見せてくれた。

「ありがとう。じゃあ私も」

君はそう言うと、僕と同じようにフレンチクルーラを僕の皿に置いた。

「ねえ、食べかけの方を渡すと間接キスになっちゃうよね。河村君、そっちの方がよかった？」

僕は飲みかけのコーヒーが気管に入り激しく咳き込んだ。

「あつ、大丈夫？」

君は慌てて水色のハンカチを渡してくれたが、僕はそれを使えるはずもなかった。しばらくすると胸の違和感もなくなり、受け取っ

たハンカチを返した。

「秋山さんって、ほんと見かけによらないよな」

「えっ、そう？」

君は時折見せる小悪魔的な表情を浮かべた。

毎日が同じことの繰り返しだと諦めていた僕にとって、今日のよ
うな展開は嬉しい誤算だった。だけど話はそれでは終わらなかった。
「さっき、店の人が秋山さんに話しかけていたけど知り合い？」

僕は冷めかけたコーヒーを一口飲むと、内心の動揺を隠しつつ訊
いた。（「葵ちゃんの彼氏？」と訊かれ「えへへへーっ」と笑っ
たことはどういう意味だろう）

「彼女は従姉でノブチャンっていうの。若いけどこの店の責任者
よ。もちろん雇われ店長だけど」

「ふーん」

「私もときどきここでバイトしているの」

「へえー」

「ノブチャンが店長しているので安心だっていうことで、休日の前
の日とか結構遅くまで働いてるのよ」

「ほおー」

君はなにが可笑しいのか、クスクスと笑い出した。

「俺、何か変なこと言ったっけ？」

僕は君の笑顔を見ることができて嬉しかったけど、その理由がわ
からず少し混乱していた。

「だって河村君の返答、ふーんとかへえーとか全部感嘆詞で、それ
におじさんみたいに妙に落ちているし」

「ふむ」

「ほらね！」

そう言つと君はまたもクスクスと笑い出した。僕の愛想のない受
け答えを君がなぜこんなに喜んでくれるのか、僕には全くわからな
かった。

だけど心奪われている女の子の笑い声は暖かった。そしてその

とき僕のまわりの世界が、こんなに色鮮やかで親密なものだとは思わなかった。そんなことは生まれて初めての経験だった。

僕は頬が弛緩しないように気をつけながらも、言葉は勝手に口から滑り出る。

「ところで、どうしてバイトしているの？ 買いたいものがあるとか、将来の夢のためとかかな」

君はうーんと小さく唸り、クリーム色のティカップを数秒間見つめた。その瞳の色は少し悲しげで、僕の胸は急に不安の波が拡がった。

「しいて言うなら生活資金かな。私の家、ちよつと複雑なんだ。って言ってもおばあちゃんもおじいちゃんも弟もいるから賑やかだけど……。私、卒業後進学したいので、それで生活の足しに少しでもなればって」

君は少し照れながら、そう答えた。

「あつ、そうか」

僕は今日君の事を二つ三つと知ったけど、それだけことで君について他のことは何も知らなかった。それから僕は受験勉強をして意味のない知識は蓄積しているが、ただそれだけの無知で無力な十七歳だということも実感させられた。

「エライなあ」

僕はそれしか言うべき言葉が見つからない。

「そんなことないよ。バイトでいろんな人と接するのも結構楽しいよ」

「だから広告取りも上手かったんだ」

「えーっ、そうかなあ？」僕の目の前に座っている少女はレモンティを一口飲み、楽しそうに笑った。

そのときの君のあどけない笑顔に、僕はどれほど救われただろうか。

「そついえば河村君、広告とりのノルマ言われたとき困ってたね」

「こんな無愛想な男が広告とれると思う？」

「うーん、確かに」

「だろう」僕は少し傷ついた。

「でも河村君には河村君だけの魅力があると思うよ」

「えっ、そうかな」

「河村君はあまり喋らないけど、ちゃんと見てるところは見てるっていうか、ものごとを深く考えられるんじゃないかなあ」

「えっ、そう」僕は心底嬉しかったが、頬の筋肉が再び弛緩しそうになるのを必死でこらえていた。そして自分以外の人間と話をすることが、これほど楽しいとは思ってもみなかった。

気がつけば、外は夕暮れの切ない茜色に包まれていた。

「そろそろ帰ろうか」

僕は腕時計を見ながら、クールに言った………つもりだ。

本当はコーヒーを何杯お代わりしてもいいから、君と同じ空間にいたいんだけど、時は無常にも過ぎていく。

「あっ、ホント、こんな時間だ」

君も左手首を返して銀色の腕時計を見る。

「ノブちゃん、帰るね」

君は従姉に手を振ると、従姉は「葵ちゃん、デートは楽しかった？」と訊いた。

君はまたもや「えへへへーっ」と嬉しそうに笑う。

僕はそしてその笑顔の意味を考える。でもその答えは出ない。（ねえ、僕たちは今、デートをしたのだろうか？）そんなことを訊くほど、僕は愚かではないけど臆病者だ。

店の自動ドアがウィーンという音とともに開き、僕らは外に出た。すでに夕焼けの残照はほとんどなく薄い闇が下りていた。

外界はびっくりするくらいの速さで暗くなっていく。君といると、どうしてこんなに時が速く過ぎ去ってしまうのだろう。

夏の終わりを告げる風は北西から吹き、夕闇の空気は冷やかだ。僕たちの制服はまだ夏服のままだった。君は口をすばめて右の手の

ひらで白い左腕を擦る。

「急に涼しくなっちゃったね」

「うん、秋山さんの家はこっち？」

僕は右方向を指差すと、君は小さく頷いた。

「河村君の家はあっちだったっけ？」

君が左方向を指差すと、僕は無言で頷いた。

「送るよ」僕は当然のように言う。

「えーっ、私の家、ここから結構あるよ。いいの？」君はまた悪戯好きの少年のような眼差しで訊く。

「うん、かまわない」（ああ、どうして僕はもつと気の利いた言葉がでないのだろう！）

「ありがとう」君の少し低めの声を聞き、僕はほつとする。

先ほどまで向かい合ってドーナツを齧り暖かい飲み物を飲みながらいろんな話をしていただけ、君を送る道ではお互いあまり話をしなかった。

僕たちは国道沿いの幅の広い歩道を並んで歩いた。近くには古いお寺があつて、境内の前には大きな木が並んでいる。夜の闇が迫ってくるのとそれらの木々の葉も深い緑色に変わっている。また強い北西の風吹きそれら木々の葉をざつと揺らめかせる。その音に驚いたのか、それとも風の冷たさを感じたのか、君は少し身震いしたような仕草を見せた。

「寒い？」

「うん、私すつごく寒がりなんだ」

「ふーん」

「手先とか足の指とか末端が凄く冷えるんだよ」

「へえー」

「ほらあ」

君は形のよい小さな右手を僕の右の頬に当てた。僕は君の手の冷たさを感じる余裕などなく、逆に顔中がカツと熱くなった。

「わあっ、河村君のほっぺたってあつたかいね」

「子どもは風の子ですから」（僕は自分が何を言っているのかわからなくなっている）

「じゃあその風の子のエネルギーを私に分けてくれる？」

君は僕の目を覗きこんでそう言くと、柔らかな右腕を僕の左腕に絡ませてきた。そのとき僕の心拍音はずんずんと身体全体に響き渡った。胸がドキドキするといった、そんな生易しいものではない。胸の奥から僕の身体を構成する細胞ひとつひとつに、痺れるような衝撃波が走るのだ。僕はそのとき、ひよっとして髪の毛が逆立っていたかもしれない！

当然その後のことはあまり覚えていない。君を市営アパートまで送ったことはぼんやりと記憶にあるけど、それ以外のことは定かではない。君の身体とのコンタクトによって、僕は夕暮れの雲の上を歩いていたのだろう、たぶん。

妹が知っていたこと

その日の夜、僕は自分の部屋でFM放送のクラシック番組を聞くとはなく聞いていた。おそらくモーツァルトの室内楽だ。モーツァルトの楽曲についてはそれほど詳しく知っているわけではない。だけど何となく彼の作品だとわかってしまう。なぜだろう？

しかし今はそんなことはどうでもいい。机の上に広げてある英語の問題集の英文も目の網膜に映るだけで、脳の中まで到達していない。僕はまだ君と話したミスタードーナツの店内にいるようだった。（君との帰り道の記憶は曖昧だ）

コンコンとドアを叩く音がした。

「いいよ」と声をかけると、白いトレーを持った妹の香織が入ってきた。トレーの上にはミルクティーが入ったカップが二個あった。

「お兄ちゃん、はい、これ」

香織は僕の緑色のマグカップを机の上に置くと、自分はベッドに腰掛けてミルクティーを飲み始めた。紺色のトレーナーとグレーのトレーニングパンツというシンプルな格好だが、最近やけに女っぽくなったようで、同じ部屋にいと何となく照れくさい。妹はそんな僕の心境の変化などお構いなしに、居心地がいいのかよくこの部屋にやってくる。

香織はごくつとホットミルクティーを一口飲むと、意地悪そうな上目使いで僕を見た。そして何やら妙な笑みが彼女の口元にはりついている。二歳年下の妹の視線を受け、なぜかゾゾゾッと背中にも悪寒が走った。

「お兄ちゃん、今日ミストでデートしてたでしょ」

思いもかけない妹の言葉に、僕は危うく口に含んだミルクティーを嘔き出しそうになった。しかし目を白黒させながらも、なんとか我慢した。

「あれは文化祭の会場係の打ち合わせだ」

「ぶぶつ、ウソだあー。でも葵先輩って可愛いよね。お兄ちゃんもなかなかやるじゃん」

勘の鋭い妹は僕の言葉など信じていない。

僕にとって女子高生は未知の地球外生物のように理解不能だ。秋山さんしかり、妹の香織しかり。

「香織は秋山さん、知っているのか？」

「うん知ってるよ」妹は足をブラブラ揺らせながらミルクティーを飲みつつ、あっさりと答えた。

「どうして？」

「お兄ちゃん、葵先輩って偉いんだよ。優しくしてあげなきゃ、ダメだよ！」

「はっ？」最近、僕にとってわからないことが、やたら増えているような気がする。

「私、ボランティア部でしょ。それで養護学校を訪問したり、障がいのある人といっしょにイベントとかやっているわけよ。葵先輩の弟君、養護学校に通ってるんだよ。体の麻痺がきつくて、介助とかなり大変なんだよ。それにお父さんとお母さんいないし」

「そう……かあ」

僕の脳裏にミスタードーナツの店で楽しそうにしている君の顔が浮かんた。君はクラスの友だちのこと、文化祭の準備のこと、そしてアルバイトで体験した面白いことなどを僕に嬉しそうに話していた。だけど君の家庭の話になったとき、一瞬その澄んだ瞳が少し困ったように曇ったことも思い出した。

僕はまだ、本当に君のことを何も知らないのだ。

僕はかなり深刻そうな表情を浮かべていたのだろう。手にしたマグカップにはミルクティーがほとんど残っている。

「でもお兄ちゃん、最近いい感じよ。人並みに青春しているみたいで」

香織は重い沈黙を嫌がるように言い放った。

「なんだよ、その人並みに青春してるって」

「だってお兄ちゃんの友達って、石川君とかヒグチとか変人ばかりじゃない。他の子みたいに部活動やるとか、ぱっと遊びに行くとかしないでしょ」

「うっ」返す言葉がない。

石川は通信制のサポート校に通っている活字中毒者で、学校が終わると図書館で本を読んでいるか、ブックオフでバイトをしている。ヒグチは僕の同級生でバイトの金が溜まると寝袋を抱え山とか森に行って、巨木と会話している奴だ。（本人が『俺は木と話ができる』と言っている）

そう言われてみれば確かにユニークな奴らだが、僕から見れば香織だって変わっている。

妹はファッションにやたらうるさく、ロングヘアを茶色に染めている。爪も透明なマニキュアで光らせているし、眉も整えるために毎晩鏡を見ながら入念にチェックし処理している。もちろん両耳には銀色のピアスが光っている。制服のスカートはかなり短めでそれから毎月何冊もファッション雑誌を購入し熟読している。一般的に見ればチャラチャラしている派手目の女子高生だが、障がいのある人や老人、小さい子どもには大変優しい奴なのだ。石川やヒグチに対してもどちらかといえば好意的で、とくに石川には優しいよな気がする。

「前はお兄ちゃん学校で見ると、つつけんどんで、近寄るな、あっち行けって雰囲気だったけど、今はなんだか表情がやわらかくなってるもん。葵先輩は偉大だなあ」

「まあ秋山さんとはたまたま文化祭の係がいつしよで、話しやすいし」

僕は香織に一方的に言い負かされているのが癪で、素直になれない。もっとも二歳年下の妹に十七歳の男が自分の心情をべらべら喋れるはずもない。

「お兄ちゃん、物事には必然の流れということもあるのよ！」

「うん？」　なんだか今夜の香織は妙に偉そうだ。

「お兄ちゃんはたまたま偶然に、葵先輩と仲良くなったと思ってるでしょ？」

「ああ、そうだろ」

「ぷぷつ、男の人ってどうして単純で物事が見えないのかなあ」

香織は僕をまるで年下の男の子のように見下し、ニヤニヤ笑っている。

「なんだよ、その変な笑いは。言いたいことがあるなら言えよ」

「お兄ちゃん聞きたい？」　妹はとても楽しそうだ。

「別に」

「ホント？」

「まあお前が話したいのなら、聞いてやるけど」

「じゃあ言ーわない！　お兄ちゃんにとってはいいい話だけどなあ」

女子高生という生物は意地悪で残酷だ。この生意気な妹に対して兄として威厳を保ちたい気持ちもある。けれども僕の脳裏に君の少し悲しげで澄んだ瞳が浮かんできた。

「聞きたいんだけど」

君の事を想うと兄としてのプライドはいとも簡単に砕け散った。

そして目の前の香織は満足げな笑いを浮かべた。

「お兄ちゃん、これまで葵先輩のことほとんど知らなかったでしょ？」

「ああ」

「だからといって、葵先輩がお兄ちゃんのこと知らないとは限らないのよ」

僕は嫌な予感がして香織を睨んだ。

「香織、お前が僕のこと、いろいろと秋山さんに話したのか！」

妹は兄の言葉に全く動じずまたもやニヤニヤ笑っている。

「お兄ちゃん、それって自意識過剰じゃない」

「じゃあ何で秋山さんは僕のこと知っているんだ？」

「お兄ちゃんは自分のことで一生懸命になると、周りが見えなくな

るタイプでしょ？」

「まあ……そうかもな」（人間そんなもんだろう）とも言いたかったが、兄としてそして年長者の威厳を保つため、その言葉は飲み込んだ。

「ところでお兄ちゃん、以前バスの停留所で盲導犬を連れた女の人といっしょだったことあるでしょ？」

「うん？」

香織が突然何を言い出したのか、僕はわからなかった。だが確かにそんな場面はあったと記憶している。それは今年の春のことだった。

「そのときお兄ちゃん、その目の不自由な女の人がちゃんとバスに乗れるか心配していたでしょう？」

そういえば、そのようなことがあった。僕は記憶の糸を辿ると、徐々にそのときの光景が頭の中に甦ってきた。

僕はそのとき何となくその女の人と盲導犬が気になっていたのだ。なぜかというとそのペアからぎこちない印象を受けたからだ。盲導犬は新米のようで、女の人もその犬になれていない雰囲気だった。だからそのペアがちゃんとバスに乗れるか確認できるまで、僕は自分の乗るバスが来てもそれに乗らずにバス停留場にとどまった。「その女の人をちゃんと案内してあげたのでしょ。で、その場所に葵先輩がいたの気づいた？」

気づかなかった。聖徳太子じゃあるまいし、そんなの気づく余裕なんてあるわけない。

「それで私が夏休みに、ボランティア部の活動で葵先輩と会ったとき、葵先輩はお兄ちゃんのこと凄く感心していたわよ」

「ふーん」僕は必死で平静さを装った。

「まあ、お兄ちゃんがそういう行動をできたのは、私のおかげだとはちゃんと言っておいたけどね」

「……」

「それからお兄ちゃんと変人ヒグチのペアは結構目立っているのよ。」

野人のヒグチと何考えているかわからない河村のコンビは。お兄ちゃんたちはその自覚はまるつきしないだろうけど」

「ふーん」

「目立っているけど、人気があるわけではないのよ」

「ふん」

「要は変人二人組ということで、異端視されてるだけなのよ」

妹とはいえ、よくもまあ思ったことをズバズバ言えるものだ。

「だから私は葵先輩に教えてあげたの。お兄ちゃんは野人のヒグチだけじゃなくて、繊細で傷つきやすく読書家の眼鏡がよく似合う石川君とも仲が良いってことも」

ヒグチと石川の扱いがえらく違っているような気がしたが、今はそんなことはどうでもよい。香織としては僕をフォローしたつもりなのだろうか？　しかし香織と秋山さんとはこんなところに繋がりがあったとは思ってもよらなかった。

「お兄ちゃん！　葵先輩は弟のマコト君の世話も大変だし、親代わりのおじいちゃんとおばあちゃんはかなり年取ってるから、しっかり支えてあげてね。受験生で大変だと思うけど」

「うん、そうだな」

僕は神妙な顔をして頷いた。自分自身に言い聞かせるように。

そんな僕の顔を見た香織はにっこりと笑った。それから空のマグカップをお盆に載せ「じゃあ、おやすみ」と言い、僕の返事を待たずに、さっさと部屋を出て行った。

野人との遭遇

受験生という立場は不安定で、だから僕は時間が経つのが速いような遅いような曖昧な感覚で生きている。受験勉強をしているときは時がゆっくりと進んでいるように感じるが、センター試験まであと何日と考えれば、時の進み具合は速いようにも感じる。

だけど君と出会ってから、明らかに時間の感覚が変わった。僕は凝縮された手ごたえのある時を過ごしている。密度の濃い時間は速く過ぎ去っていく。

九月も終わりに近づき文化祭の準備も具体的なものとなった。第四土曜日の二十六日は本番一週間前ということで、実行委員の面々はそれぞれの任務を果たすべく登校している。校内には君と宮田さん合作の文化祭メインステージ用ポスターが貼られている。それとともにクラスの出店や文化部企画を知らせる手作りのポスターも掲示されている。

僕たちは午前中、会議室で宮田さんを交えて打ち合わせをした。主に文化部の展示・企画内容と会場設営の留意点の確認だった。各クラス企画についてはおおまかな内容の把握くらいで、こちらですることはほとんどない。

宮田さんは会計担当だが、実質、実行委員会をコントロールしているのは彼女だった。委員長の大野や副委員長、企画部長たちはミハーで単細胞なのでメイン会場の企画ばかりに目が行っていた。というか自分たちのバンドがいかに目立つだけしか考えていない。だから奴らは当然全体的な視野が欠けていた。そこをちゃんとフォローするのが宮田さんで、会計係というより事務局長といった感じだ。

僕は友人のヒグチを通じて宮田さんのことは多少知っていた。、彼女はクールな雰囲気と整った顔立ちから下級生の女子生徒からカリスマ的な人気を誇っていた。僕は人気のある人間を信用しない偏

狭な心の持ち主だが、宮田さんは違った。彼女は責任感が強くて頭の回転も速くまた柔軟な思考もできる、実行委員会にはなくてはならない存在だったのだ。何でもできる人間って本当に存在する。（大野の奴なんか、いなくていいのだ！）だからその日の打ち合わせも順調に進み、午後からの仕事も明確になった。

昼休みのとき、「食事はどうするの？」と君は訊いてきた。僕の母は平日しか弁当を作らない主義なので（自分の都合でときどき平日もつくらない）「コンビニでおにぎりでも買ってくる」と答えた。「じゃあ私もそうしよう、宮田さんはどうする？」と君が言った。

宮田さんは「私はいいわ。今からまだやることもあるし。二人で仲良くいつてらっしゃい」

宮田さんにそう言われると、二人で行動を共にすることが何だか正しいことに思えてしまう。僕がそのことに感心していると、君はドアを開けて「河村君、行こう」と声をかけてきた。

それから僕らは急ぎ足で校門を出た。すると僕らの上には嘘のように青い、まるでデジタルカメラで映した風景写真のような晴れ渡った秋の空があった。

僕はコンビニでおにぎりを二個とペットボトルに入ったお茶を買い、君はミックスサンドイッチとメロンパンとカフェオーレを買った。

「ねっ、こんなにいい天気だから屋上に行って食べない？」

僕に反対する理由はなかった。

僕たちは無意味にハアハアと息を切らせながら校舎の屋上に駆け上がった。休日の土曜日、屋上には誰もいない。地上から十数メートルしか高度は上がっていないはずなのに、九月の空の色は違って見えた。

「気持ちいいねーっ」

十七歳の少女は両手を水平にまっすぐ広げ、百八十度の空を愛おしそつに見つめていた。雲ひとつない高く青い空は僕を少し感傷的にさせた。

「空が高すぎると悲しくなる」

「えっ？」

「確かビートルズの曲にそんな歌詞があった」

「ふーん」

そうして君は眩しそうにまた九月の空を見上げた。それから僕の方を向いて「ごはん食べよう」と言った。ジョン・レノンもポール・マッカートニーも女子高生の空腹には勝てない。

僕たちは古ぼけた木製のベンチに座り、コンビニのビニール袋からそれぞれの食べ物を取り出した。

「あと一週間だね」

君はミックスサンドイッチを両手に持ちながら小さくため息をついた。

「うん」

僕はシャケ入りのおにぎりを頬張りながら頷いた。

「私、最初は面倒くさいなあ、ヤダなあって思ってたけどだんだん楽しくなった」

「うん」

僕の口の中にはまだおにぎりがある。僕は何故かおにぎりを食べるのに時間がかかってしまう。

「河村君も最初、嫌そうにしてたよね」

「えっ、そうだったけ？」

僕はうそぶいた。

君はフツと微笑んで、サンドイッチを一口、口に含んだ。それからゆっくりと咀嚼して、カフェオーレの入れ物にストローを突き刺した。そして白いストローをピンクの唇に挟んだ。

「今は楽しい？」

カフェオーレを少し飲んだ後、僕の目を覗くように君は少し小首を傾げた。九月の強い風が君の後ろ髪を一瞬巻き上げる。

「ああ、今は楽しい。委員長はうっとおしいけど」

僕の言葉に君はちよつと困った表情を見せた。

「ごめんね」

急に謝られて僕は驚いた。そしてなぜ君が謝るのか理解できなかった。

「私、大野君と二年の時つきあっていたんだ」

「えっ？」

「でもちよつとの間だけ。ほんのちよつとだけ。つきあってみて、性格ってというか相性ってというかそんなのが全然合わなくて、すぐやめたんだよ」

「うん」

僕はそれつきり黙ってしまった。

僕はオカカ入りのおにぎりをモグモグと食べ、君はサンドイッチをモグモグと食べた。

僕が君と話しているとき、これほどもどかしい沈黙は初めてだった。君は僕に何か言っただけと願っていたし、僕も何か気の効いたことを言わなければと焦っていた。だけど僕の頭には何ひとつ思い浮かばなかった。

ふと見上げると空の真ん中をジェット機が横切っていた。糸を引く白い飛行機雲が少しずつ膨らんでいる。君も同じように空を見上げ白い飛行機雲をその瞳に映した。

「せっかくのピーカンなのにね」

「雲ができちゃったな」

君は何か楽しいものを見つけた子どものような顔で僕を見た。僕は窒息しそうな人間が新鮮な空気を吸ったように、呼吸が楽になった。

「じゃあさあ、実行委員会で大野を見たとき困ったんじゃない？」

「そうなの。実行委員させられて、大野君と顔合わせなきゃならないなんてダブルショック！」

「秋山さんもいろいろあるんだ」

「そうよ、河村君。女子高生はミステリアスなのよ」

「ふむ、確かに」

僕は実感をこめて頷いた。君は何がおかしかったのか、また目を細めて笑った。

「私ね、バイトとか弟の世話とか結構忙しいから、これまで高校の授業だけで精一杯って感じだった」

「うん」

「でも。文化祭の会場係やってよかったと思う」
「うん」

僕はそのとき思った。君は僕と同じ十七歳だけど、僕よりもいろんな辛いこと悲しいことを数多く経験してきたんじゃないかと。だから君の優しさは僕の胸に深く染み入り、君の澄んだ瞳の色は時として僕をどうしようもなく不安にさせる。

「アーツ！」

少し離れたベンチから大きなダミ声とともに、ボサボサ頭の男が背伸びをして起き上がった。

「ヒャー！」

君は驚いて僕の腕を反射的に掴んだので、僕の心臓も飛び上がった。

「ファーツ！」

その男はまだ眠たそうな声で大きなあくびをすると、骨ばった指で顔をゴシゴシと擦り始めた。それからまた「ファア」とあくびをした。

「ヒグチ！」

「おう、真一、デートかあ」

寝ぼけの僕の友人はつまらなそうに答えた。

「なんでお前がここにいるんだよ」

休日にヒグチが学校にいるなんて信じられなかった。こいつは授業のある平日でも、勝手に山に登ったり森にこもったりする変人なのだ。

僕と秋山さんはヒグチの寝そべっているベンチまで歩いて行った。ヒグチも身体を起こし、「ソー」と呻りながら両肩をグルグルと

回した。それからようやくベンチにあぐらを組んで座った。

「俺は部活だよ、自然環境部の。ほら文化祭の展示の準備だ」

「自然環境部？　そういえばお前その部員だったなあ」

「そうだ、今年、宮田遙に強引に入部させられたんだ。部員が減って潰れそうだから」

こいつは、あの宮田さんとなぜか仲がいいのだ。

「文化祭の準備って何したんだよ」

「俺はときどき山とか行つて、大きな木と話をするだろ」

「ああ……」

「それで、遥がその木の写真とかを撮つて来いって言うんで、撮ってきているわけだ」

「ああ」

「で、俺の素晴らしい写真を今度文化祭で展示する」

「へえー、なんか素敵な写真みたいですね」

君は好奇心いっぱいヒグチに尋ねたが、僕は半信半疑だ。

「えっと、キミは？」

僕は内心「ゲッ！」と叫んだ。ヒグチが他人のことを「キミ」と呼んだことを聞いたのは、こいつと知り合ってから初めてのことだった。

「あつ、私、3　Bの秋山葵。河村君と同じ文化祭の会場係です。よろしく」

僕は君の流暢な自己紹介に感心する。まるでモーツァルトのメロディラインのようだ。

「はーっ、キミが秋山さん。フムフム」

ヒグチは秋山さんと僕を交互に見ながら、一人で何か納得したかのように何回も頷いていた。僕と秋山さんは顔を見合わせ、目の前の野人の意味不明の行動に首をひねった。

「キミのおかげでネクラで陰険な真一も、人並みに明るくなったわけだ。フムフム」

相変わらず失礼な奴だが、君はクスツと小さく笑った。

「オツ！ バイトの時間だ。じゃあな」

ヒグチはそれだけ告げると、さっさと屋上から降りていった。あいつの行動はいつもこんな調子なので、僕はもう慣れてしまったけど、君はあっけにとられポカンとしていた。

「あれがヒグチ君かあ」

君は珍しい動物を見たかのように呟いた。確かに奴は珍しい動物ではある。

「変な奴だろ。悪い奴じゃないけど」

「うん面白い人だねえ。でも河村君はヒグチ君と友だちなんですよ。スゴイね」

僕は何がスゴイのかよくわからなかったが、「そうかな」とだけ答えておいた。珍獣を手なずけている人間は評価されるのだろうか？

17歳の現実

僕たちは再び元のベンチに座った。空を見上げると銀色の光を反射させていた飛行機はすでに飛び去っている。そして飛行機雲は拡散し青空に溶け込もうとしていた。

君はしばらく飛行機雲が消えなかった空を見つめていた。まるでそこに大切な宝物が隠されていて、それを必死に探し出そうとしていた。いるみたいだった。

「ねえ河村君、ひとつ訊いていい？」

突然君は僕の目を見つめながら問いかけた。君の瞳は脅えているように見え、少し低い声は緊張していた。

「うん」

僕は息を飲み込んだ。

「河村君は大学に進学する予定でしょ？」

「うん、一応東京の大学に行く予定だけど。今のままだと浪人するかもしれないなあ」

「ふーん、やっぱりそうなんだ」

君は僕から目を離し、ぼんやりと屋上の風景を眺めた。僕らの高校は高台にあり街を展望できる。

「私は地元の看護学校に行くんだ」

「そっかあ」

「弟のこともあるし、私この街好きだし……」

「うん」

僕たちは再び黙りこんでしまった。そのとき僕も君も語るべき言葉を見つけることはできなかった。

僕たちは静かにベンチに座っていた。

乾いた九月の風が君の柔らかな前髪を少しだけ揺らした。

周囲には物音ひとつ無かった。

まるで時間が止まったように、僕たちのまわりの世界は静止して

いる。

「ここが東京だったらいいのにね」

君はそう言うのと僕の右肩に形のよい頭を乗せた。僕の右肩には君の暖かな体温と確かな重みを感じていた。

そのとき僕はセンター試験も大学入試も文化祭の準備も、そんなことどうでもいいと思った。こんな風に君と同じ時間を過ごせたらと願った。

だけど僕たちは高校を卒業すれば、それぞれ離れた街で暮らすという現実があった。

僕の右手に暖かいものが落ちてきた。それは君の涙だった。

僕の胸は鋭く痛んだ。

君のことを思い僕自身のことを考えると、現実はい理不尽だと感じた。せつかく掴んだ大切なものが徐々に消えていく。そんな喪失感が僕の胸の内にあった。

そのときの僕は君に頼りない右肩を貸し、何の力もない右手で君の左手を握ることしかできなかった。

「ウン！」

君は小さく叫んで顔を上げた。僕はズボンのポケットからハンカチを取り出し、それを差し出した。

「アリガト……」

君はそのハンカチで瞳をそっと押さえ、「ゴメンネ」と謝った。

僕は首を振るだけだった。

君は無理やり微笑をつくろうとしたけど、上手くいかなかった。

僕は小さく震えている君の唇を僕の乾いた唇でふさいだ。君は何かを確かめるように、僕の首にまわした手に力をこめた。僕は君の冷たくてやわらかい唇に触れることで、君の存在を感じた。

僕はそのとき初めて永遠という言葉をほんの少しだけ信じられる気がした。

月曜日の朝の出来事

月曜日の朝、高校の教室に行くと君と宮田さんが固い表情でやってきた。

「河村君、大変だよ！文化祭のポスターが破られている」

君は瞳を大きく見開いて憤慨している。

「え、うそっ」

「ホントだよ。校内に貼ってあったのが何枚も破られているんだ。もう！」

「職員室の前と玄関前、それにこの校舎の階段踊り場に貼ってあるポスターと合計三枚が破られている」

宮田さんはこんなときでも冷静だ。だけど、あのシニールなデザインのポスターは君と宮田さんの合作なので、二人ともショックは大きいだろうと想像した。

「おう、遙、朝っぱらからどうした？」

珍しく始業前に通学してきたヒグチが不思議そうに訊いてきた。

宮田さんを名前で呼ぶことができるのは、僕の変な友人だけだ。

「ツヨシ、文化祭のポスターが校内で三枚も破られていたのよ」

（ヒグチは剛ーツヨシという名前だ）

「へえー、いたずらにしちゃひどいな」

「あれはいたずらじゃないですよ」君は心外だといった表情を浮かべた。

「うん、あの破り方は悪質ないたずらよりもっとひどいもの」

「どんな風に破られた？」僕も口を挟んだ。

「ポスターの真ん中をナイフで×印なんだよ。ねえ河村君、信じられる！」

「何だか悪意を感じるな」僕は嫌な気分になった。

「そうね、面白半分でやったのではなくて、悪意をもって意図的に行った。それに刻まれた×印は何かのメッセージかもしれない」

「ふむ」ヒグチが真面目に頷いた。

君と僕は俯き加減で熟慮している宮田さんの様子をぼーっと眺めていた。そういえば今朝の宮田さんは眼鏡をかけてなくコンタクトレンズを装填している。そのためなのか、その容姿はびっくりするくらい美しい。その宮田さんが右手を顎の下に当てて深く考えている姿は、上質なミステリー映画のワンシーンを見ているようだった。

「ん、どうしたの？」

僕たち二人の視線に気づいた宮田さんが急に顔を上げた。

「い、いやっ。別に」僕はちよつと驚いてしまった。

「宮田さんって考えているだけでも絵になるんだ」

君が感心していると「ふふっ、ありがとう」と宮田さんはさらっと答えた。

「遙、その×印っていうのは、よくないメッセージという意味か？」

「おそらく」

宮田さんの言葉は説得力があるので、僕は少しの間考え込んでしまった。

「でもさ、どうしてこんなことするの？ 文化祭って楽しいのに」

君は口を尖らせている。

「秋山さん、私も確かにほとんどの生徒は文化祭を楽しみにしていると思う」

「うん、うん」君は首を縦に数回振った。

「しかし、なかには文化祭というイベントが大嫌いな人間もいるかもしれない。その理由はわからないけど」

「そっかあ」君は宮田さんの説明にかなり納得したみたいだ。

「世の中、変な人間が結構多いんだよ」ヒグチが真面目にそう言ったので僕ら三人は噴き出してしまった。

「何だよ。俺、変なこと言っただか？」

ヒグチはみんながなぜ噴き出したのかわからなかった。

「うっん、ツヨシの言っていることはそのとおりよ」

宮田さんが珍しく笑いをこらえていた。それから息を吐き出し呼

吸を整えて言葉を続けた。

「ともかく今後は気をつけたほうがよさそうね。私も実行委員会のみんなには注意するように言っておくから」

「私、絶対犯人見つけて捕まえてやるんだから、ねっ河村君！」

君は腕を組みピンクの頬を膨らませて言い切った。

謎の店主がお礼を言う

その日の放課後、生徒会室に行くと実行委員長の犬野が難しそうな表情をつくってみんなに語り始めた。

「今朝、文化祭のポスターが数枚破られるという大事件が起こった。俺たちが必死で準備している文化祭を妨害している奴がいる」

犬野はそこまで言うと、周囲の実行委員たちの反応を確かめるようにあたりを見回した。僕たち実行委員は黙って彼の話を聞いていた。犬野は僕たちの反応に満足したようで話を続けた。

「文化祭まであと数日に迫っているが、俺たちはこんな妨害に屈しない。何としても文化祭を成功させなければならぬ。みんな、わかったか！」

いつものように犬野の話は無内容だ。その話にアリバイ的に頷いたのは副委員長の小杉と企画部長の藤本だけだった。

そのあと犬野は僕を指差してこう言った。

「河村、お前ポスターを貼らしてもらっている家とか店とかをチェックして来い。破られてないかどうか」

「俺が？ 全部？」

「そうだ、全部チェックして来い」

こいつはいつも高圧的な口調だ。隣にいる小杉は神経質そうに唇を歪めて笑っている。

「じゃあ同じ会場係として私も行きます！」

君は右手を上げて名乗り出た。

「葵は行かなくていい。他にやることがあるだろ」

「犬野君！ 一人で貼ってある全部のポスターをチェックできるわけないでしょ。それから私のこと葵って呼ばないでくれる！」

「そうそう、つきあっているわけじゃないし。犬野君はデリカシーに欠けているのよ」

文化祭パンフ作成担当の諸星雪乃がフォローした。彼女は意志的

な黒い瞳とチャーミングな微笑みをもつ実行委員会のムードメーカーだ。幼い頃の事故で左足の膝から下が義足だけど、彼女の周りにはいつも暖かくやわらかな空気がある。

「大野君、パンフレットに広告を出してくれたところだけ確認したらどう？ そこにはポスターを貼らせてもらっているし、当日の案内もできるし」

「さっすがあーっ遙。それだったらポスターのチェックと宣伝と一石二鳥だね」

諸星さんと宮田さんは親友だ。

「まあ、じゃあ、そういうことにしろ」

大野は不満げに言い放った。

「葵、河村君、パンフに広告を出している会社とお店は地図に落としてあるから」

諸星さんは自分の席から僕と君を手招きした。それから僕たち三人が検討した結果、主に商店街を回ることとなった。

「そんなに厳密に回ることないよ。適当な時間になったら切り上げちゃったら」

「うん、そうしよつか。それから雪乃、さっきはアリガト。大野君はどうしてあんな言い方するんだろ？」

「ジェラシーよ、ジェラシー。男の嫉妬は醜いねえ」

諸星さんは声をひそめ、それからにっこり笑った。

「二人で仲良くデートしてきたらいいじゃん！」

「真一、そうしよつか？」

「おっ、真一と呼んだね」諸星さんはなぜか嬉しそうだ。

「河村君と真一とつちが呼ばれるのがいい？」

君がときおり見せる悪戯っぽい瞳が輝いた。

「いやっ、別にどっちでも」

僕は動揺した。

小悪魔のような女子高生二人は楽しそうに笑い合っていた。

白っぽいアーケードに覆われた商店街は、平日の夕方でも多くの人が行き交っていた。彼らは何かに追い立てられているのか、一様に足早に移動している。また進入を許されていない自転車、コービー・ブライアントのドリブルのように人の間をぬって通り過ぎる。僕たちは諸星さんから渡された地図を頼りに、ポスターの貼つてある店を一軒一軒訪問した。といっても貼つてあるポスターを確認し、週末の土曜日と日曜日が文化祭だということを告知するだけだったので、時間のかかる仕事ではない。ポスターは店頭に貼つてあるところがほとんどで外から確認できる。

二人で分担して店を訪問したので、一時間ほどで任務は終了した。僕らは自動販売機が数台並んでいるスペースで休憩した。自動販売機の横に一メートルくらいの高さのテーブルがある。その上に僕はそれぞれのデイバッグを置いて、ゆっくりと缶コーヒーを飲んだ。

「やっぱり商店街に貼つてあるポスターは破られていなかったね」

君はさも当然といった風に口を尖らせた。

「ふーん、秋山さんはそう思っていた？」

「だって宮田さんも言っていたでしょ。ポスターを破ったことはメッセーじだつて。そう考えると、学校内が攻撃の対象のような気がするんだなあ」

君は敏腕刑事が推理するように右手人差し指を眉間に当てた。

「なるほど」

僕は同意して缶コーヒーを一口飲んだ。

「だけど大野君はひどいよね！ 河村君ひとりに、こんな仕事を押し付けるなんて」

「うん、まあ、ちょっとびっくりしたけど」

「やっぱり雪乃が言ったように、ジェラシーなのかなあ」

君が真剣に考えているので、僕はなぜかおかしくなった。

「ん、私、何か変なことあったかな？」

君はきょとんとしている。

「いや、だけど、こうして二人でいられるし」

「あつ、そうだね。大野君の陰険な陰謀も裏目にでちゃったわけだ」
君は僕の方を横目で見てニヤリと笑った。

「でもさ、秋山さん、時間いいの。いろいろ忙しいんじゃないの？」

「うん、文化祭までは、ちよつと時間つくつてもらったんだ」

「じゃあ商店街をちよつとブラブラしていく？」

「うん！　ねえ河村君、CDショップに行こう。案内してよ。私、

河村君に訊きたいことがあるんだ」

君は飲み終えた缶コーヒーを空き缶用ゴミ箱にポイッと正確に投げ入れた。それから僕の手をとって早く行こうと催促した。僕は慌てて缶コーヒーを飲み干すと、君に引つ張られるように歩き出した。

僕もときどき行くCDショップは、神経質そうな中年の男が経営している。店主は身長百六十センチくらいで痩せていて、分厚いレンズの眼鏡をかけている。頭髮は薄く、服装はいつもシャツの上に灰色か茶色のベストを着ている。店の商品はクラシックとジャズが中心でロックもかなりある。一応ポップスの新譜もあるが、それらは適当に入荷した感じだ。店内のレイアウトも趣味的で、貼つてあるポスターも今人気のあるアーティストのものではなく、マイルス・デイビスだったり、ブライアン・ジョーンズがいるザ・ローリング・ストーンズだったり、松田聖子だったりする。だからそんなに繁盛しているわけではなく、僕が行くときはいつも客は他に誰もいない。僕はその店に入るたびに、これでよく潰れないなあと思う。ひっそとしてこの無愛想な店主は謎の大富豪で、趣味としてこの店をやっているのかもしれない。

僕たちがこのCDショップに入っても、店主は挨拶ひとつせず、ジロツと一瞥しただけだ。僕ひとりのときはそんなことは気にもしないのだが、君と二人で入ったときは、（挨拶くらいはしろよな、俺たちお客だぞ）と思ってしまう。

「河村君、癒される音楽って何だろ？」

「癒される音楽？　ヒーリング系とかクラシックかなあ」

「それからちよつと落ち込んだときとかに聴くと、元氣が出るやつとかはないかな？」

「ふーん」

「それであんまり値段が高くないのね」

「やっぱりモーツァルトあたりがいいかな」

「モーツァルト？」

「うん、それも室内楽とかヴァイオリン協奏曲とかがいいよ」

「ふーん」

僕たちはクラシックのコーナーに行つて、モーツァルトのCDをあれこれ引つ張り出した。ヴァイオリン協奏曲、ピアノ協奏曲、室内楽、ヴァイオリンとヴィオラの二重奏曲とこの店の規模に反して結構な品揃えだ。（店主の趣味かもしれない）

「うーん、いっぱいあるね。私わかんないし、河村君のお勧めは何？ 私、それ買うし」

「うーん、モーツァルトの楽曲はほとんどはずれがないから難しいなあ」

「そっかあ」

「あのさ、僕の持っているCDを何枚か秋山さんに貸すよ。その中から気に入ったやつを買ったらどうだろ」

「あーっ、それいいねえ。うん、そうしよう」

さっきまで、難しい顔をしてCDを選んでいた君の表情は一転した。

そのとき僕の背中に何やら視線を感じた。振り返るとレジの奥に立っている店主と一瞬目が合った。彼は僕たちの会話が聞こえたのだろうか？

（地獄耳！）そう思いながら僕は店主のほうを見つめたが、彼は知らん顔をしてカタログのようなものを読み始めた。

「河村君、どうしたの？」

「あつ、そろそろ帰ろうか」

「うん」

僕らが店を出るときに「アリガトウゴザイマシタ」と店主が言った。僕がCDを買っても、「どうも」としかお礼を言ったことのない店主がそう言ったのだ。僕の目に映る世界の風景は日々変わり続けている。

文化祭1日目の衝撃

文化祭1日目、早朝のことだった。

「お兄ちゃん！ 早く来てよ！」

妹の香織に引つ張られて、僕はボランティア部が企画展示している一階の一年D組の教室に入った。（月曜日と同じパターンだ！）君も慌ててついて来た。

少し息を切らせてる僕らの視界に飛び込んだのは、太い黒マジックで落書きされている展示物の数々だった。それらはボランティア部員が模造紙に写真を貼ったり文章を書いたりしたもので、ボードに掲示されている。模造紙に貼ってある写真には、部員たちが障がいのある子どもたちが座っている車椅子を押していたり、彼らの食事の介助をしている様子が映し出されているものだ。それらの展示物に『バカ』や『クズ』、『偽善者』と罵る言葉が書きなぐられている。ある模造紙には下手な字で『死ね！』と書かれていた。

香織を含めたボランティア部員は呆然とその光景を見つめている。僕もあつけにとられ、自分の心臓の音がやけに大きく聞こえる。

「とりあえず片付けようか？」

ボランティア部の部長の西川さんが疲れた声でそう言った。数名の部員たちはその声に促されて、落書きされた模造紙を展示ボードから取り外した。

「お兄ちゃん、葵先輩、こっち！ こっち！」

香織が教室の隅から手招きしている。妹の指図どおり僕らはその場所に歩み寄った。そこには訪問者体験用の車椅子が設置してあった。

「ここ見てよ！ ここ！」

香織は珍しく険しい顔をして車椅子の座席を指差した。深緑色のレザー製座席には×印がくつきりと刻まれていた。これは明らかに鋭利な刃物で傷つけられている。

「×印」

君はぼそつと呟いた。

「どうしたの？」

大柄な西川部長が香織に心配そうに訊いた。

「部長、こっち来てください。車椅子もやられているんです！」

「えっ」

「うそぉ」

西川部長や他の部員も、全員車椅子の周りに集まった。

「ひどい」

「どうして、こんなことするの！」

当然部員たちは更にショックを受けてしまい、なかには涙を流している女子もいた。

文化祭当日とは思えない沈み込んだ空気が僕らの周囲を包んだ。

しかし僕は文化祭実行委員として、やらなければならないことがあった。

「西川さん、ボランティア部の企画展示、どうする？」

文化部の企画運営に関しては、会場係の僕らが責任を負っているのだ。

「うーん、みんなの意見を聞いて顧問の先生にも相談してみるけど、ふくよかな西川さんは相当エネルギーを使ったようで、汗ばんだ額を白いハンカチで拭っている。」

「部長、やりましようよ！　せつかく準備してきたし、こんなことで中止になったら、それこそ犯人の思う壺ですよ」

香織は怒りを含めた瞳で頬を紅潮させ叫んだ。僕の妹は負けず嫌いな性格だった。

「うん、やろう」

「うん」

他の部員たちも香織の意見に賛同した。沈み込んだ雰囲気少しずつ明るくなったようだ。

「じゃあ、みんな、展示物は作り直そう。まだ使える写真もあるし、

駄目になった写真はパソコンからプリントアウトして。それから車椅子はもう一台学校にあったと思うので、誰か手配してきて」

西川部長も少し落ち着いたようだ。

「西川さん、何か必要なものがあるのなら言ってね。実行委員会の備品とかも使っているし」

「ありがとうございます」

君の言葉に西川部長は少し安堵したようだった。

僕らが生徒会室に戻ると、実行委員の面々が心配そうに訊いてきた。僕は被害状況と部員の様子、そしてボランティア部は展示物を作り直しながら企画展示は行うことを報告した。

「数日前のポスターの件といい、今回のボランティア部の件といい、犯人は校内の人間、それも胴一人物じゃない？」

いつも穏やかな諸星さんも怒っていた。

「でしょーっ雪乃！ 私は前のポスターの事件からそう思っていたんだ」

君は意気込んで返答したが、そのあと何事か考え込んでしまった。（おそらく犯人のことを考えているのだろう）

「それはそうと大野君、このことについて全校放送したほうがいいと思う。今回の事件をみんなにちゃんと伝えて、注意を喚起すべきだわ」

さすが宮田さんは現実的な対応を考える。

「えーっ、そんなことしたら、みんなビビっちゃうんじゃないか」

「正確な情報を伝えないほうが不安になるわよ」

「めんどくせえなあ。俺がその原稿書くのかよ」

「それだったら、私が河村君と秋山さんから事情を聞いて、原稿作って雪乃に放送してもらうから、それでいい？」

「ああ、ああ、それでいーよ。だいたい会場係がちゃんとしてねーから、こんなことになるんだろ」

「それ、どういうことだよ！」僕は頭に血が昇った。

「大野君、そんな言い方ないでしょ！ 今回のことは不可抗力なん

だから」

諸星さんも少し感情的になっている。

「ハイハイ、わかった、わかった。俺はメインステージのチェックとか、バンド出演とかで忙しいんだよ。宮田、あとは頼むわ」

無責任な実行委員長は取り巻き連中といっしょに出て行った。出て行く途中、大野と喋っていた副委員長の小杉がチラッと僕を嫌な目で見た。

「なんなの、あいっ！」諸星さんはまだ怒っていた。

「大野君が大切なことは自分のステージのことだけなのよ」宮田さんは親友の感情に影響を受けることなく冷静に分析していた。

僕は諸星さんのフォローと宮田さんの冷静さで、少し落ち着くことができた。しかし君はまだ何事か考え込んでいた。

それから僕たち四人は緊急校内放送用の原稿をつくった。二十分後には諸星さんの芯のある声が全校に響いた。

名探偵登場？

その日の午前中、僕は文化部の企画展示会場を順次見て回った。君はクラス企画のメイド喫茶の調理担当なので、昼過ぎまでこちらの方の仕事をしなければならなかった。三年生で教室を会場にした催し物を行うクラスは君がいる3 Bだけだ。他のクラスは合唱発表や演劇発表を行う予定だ。

さて僕は三階の三年生の教室を巡回することにした。この階は囲碁部や将棋部、写真部など、文化部の中でも地味な奴らが企画展示している。

一番西側の教室、3 Aは囲碁部と将棋部の合同の会場だ。囲碁部と将棋部は教室を半分に分けて、それぞれ対局の場を確保していた。教室には展示物など何もなく、碁盤や碁石、将棋の駒があるだけだった。普段の部活動と何ら変わらない。（この企画はいつたい何なんだ！）ただ囲碁部の方では年配の男性が部員と対局していたので、そこだけは一般開放している文化祭っぽかった。

隣の3 Bは賑やかだった。メイド喫茶といってもメイド役は男子生徒で、僕はその発想がどうもよく理解できない。しかしこの企画は女子には受けているようで、お客の大半は女子高生だ。そして他校の生徒もいる。彼女らは面白がってメイドに命令したりしている。メイド姿に女装した男子生徒も嬉しそうに対応している。僕は廊下につつ立って開け放たれた窓から、その異様な光景を呆然と見ていた。するとチョコレートとクッキーを運んでいる君と目があつた。君はペロツと舌を出し、右目で僕にウィンクした。僕は動揺し反射的に周囲をキョロキョロ見回したが、周りには誰もいなかった。君は小さく笑うと仕事にもどった。そのおかげなのか僕は少しリラックスでき身体が軽くなったような気がした。（ボランティア部の事件で僕はやはり緊張していたのだ）そして引き続き巡回を続けることにした。

3 Cは写真部の会場だ。展示ボードには様々な写真が展示されている。ここはポスターやボランティア部の展示物を切り裂いた犯人が狙いやすい場所だが、今のところ被害はない。教室内では部員らしき生徒が二人、高級そうなカメラを持って熱心に何やら話している。展示物は風景写真が多いと思いきや、モノクロのポートレートや街中で廃墟になった家屋の写真など、なかなか渋い作品もあつたりする。希望者にはポートレートを撮る企画もあり、マイナーな写真部もしっかり活動しているのだ。

僕はこの会場も被害がないことを確認して次の会場に足を進めた。

3 Dは僕とヒグチが在籍しているクラスだ。僕のクラスは文芸部の会場となつている。そこには文芸部の女子部員がつまらなそうに1人座つていて、自分たちが出版した本を販売していた。年に二回発行しているらしく、その内容は詩、エッセイ、小説、俳句、散文と様々だ。一冊二百円だが、もちろんほとんど売れるわけはなく、在庫はたくさんある。そのバックナンバーをすべて陳列してあつて、全部で二百冊はある。これだけ見れば文芸部も地道に活動していることはわかる。だけど教室にあるのはこれら自主制作した本だけで、展示物も何もない。

こんな殺風景な会場だから訪問者は誰もいないかと思つたら、1人いた。黒縁眼鏡の奥に鋭い眼光、細くて高い鼻と薄い唇に少しこけた頬、そして肩までかかる長髪の男はこの高校の生徒ではなかった。だが僕は彼をよく知っていた。同じ中学出身で、僕の数少ない友人である石川達也だ。

「達也、来てたのか？」

「ああ」達也はそう答えながらも、視線は文芸部が出版した本の文章をなぞっていた。

「変な奴がいるそうだな」

達也は本を閉じながら静かに僕の方を見た。

「変な奴？ ああ、文化祭のポスターとか展示物を切り裂いた奴がいるんだ。あつ、香織が聞いたのか」

「まあな。しかし、どこにでも歪んだ人間はいるな」
「うん」

達也の話した内容から推測すると、すでにこいつは香織と会ったようだ。優しくて配慮のある達也だから、妹も気分的に楽になっただろうと僕は少し安心した。

「そのポスターを破った奴と香織ちゃんとの展示物を破った奴は同じ人間なのか？」

「おそらくそうだ」

「何故そう思う？」

「ポスターも香織のところの車椅子も鋭い刃物で×印に切られていたんだ」

「香織ちゃんの話の聞くと、ただのいたずらじゃないって感じたな」

「うん、でもどうして文化祭みたいな楽しいイベントを敵視するのかなあ。もつともこんなチャラチャラしたことが嫌いな人間もいるとは思うけど」

達也は僕の話をおまり真剣に聞いていないみたいで、両腕を組んで床に目を落とし何事か考えていた。

「河村、犯人は案外個人的な感情でやってるかもしれないな」

「ん、どういう意味だ？」

「つまり文化祭というイベントがターゲットじゃなくて、文化祭に関わる人間を攻撃しているってことだ」

「あつ！」僕はその瞬間、頭の隅に釣り針が引っか掛かったような感覚を覚えた。

「考え方としてはそういう方向性もあるってことだ。どうした？」

僕は達也に問いかけられるまで自分の思考に没頭していた。
「いや、なんでもない」

僕の曖昧な返事に対し友人は何も言わなかった。彼は再び文芸部の本を手に取り、ページを適当にめくった。それから手に取った本を元の場所に戻して、僕の方を振り向いた。

「じゃあ俺、他のところ見て回るよ。世間一般の高校生が何を感じ

何を思い何をしているのか、知っておく必要がある」

「何だよ、それ」

達也は僕の言葉を聞き流し、左手を上げ「またな」と言っ
て教室から出て行った。僕は頭の隅に引っかけた疑惑が徐々に
広がっていくのを感じながら、友人の後ろ姿を見送った。

ぜんざいは嫌いだけど

僕は頭の中で膨らんでいく疑惑のため、各会場を巡回することが面倒くさくなってきた。できればどこか静かな場所で、この疑惑を解明するためにゆっくりと考えたかった。しかし会場係としての仕事があるし、午後一時三〇分からはクラスの企画に参加しなければならなかった。

僕のクラス、3 Dは体育館のメインステージで演劇をすることになっている。演目はなぜか『夕鶴』だ。クラスの女子たちが高校生活の思い出に文化祭ではちゃんとしたものをやりたいと熱望し、消極的な男子たちを押し切って決めたのだ。

僕は文化祭実行委員なので、クラス企画では負担の少ない照明係ということになった。もう一人の照明係はヒゲチで、これは僕とペアだったら彼も逃亡することはないだろうというクラスの奴らの戦略だった。（その戦略は効を奏した）

照明係は文化祭間近に迫ったステージリハーサルの日の一回だけ、当日の器具を使って練習をした。いい加減であるといえいい加減、大胆であるといえ大胆である。もつとも照明の演出効果はほとんどなく、見せ場といえ妻に去られた夫が上手から下手にとぼとぼ歩いていく最後の場面のフェードアウトくらいなものだ。

メインステージ企画の観客は実はそれほど多くない。クラスの合唱発表やバンドのライブはより、声楽部のコーラスや吹奏楽部の演奏の方が完成度の高さゆえ観客（聴衆）が多い。ところが僕のクラスの演劇発表は体育館の座席が観客ですべて埋まっていた。素人なのに真剣に劇をやるということが、多くの生徒たちの関心になり興味をひいたらしい。

実際、クラスの奴らが真剣に演技をやればやるほどある種の滑稽さがにじみ出て、観客の笑いを誘った。とくに劇の終盤に数人の男女が貧しい童の格好をしていきなり登場してきたとき、会場は大爆

笑だった。この場面自体は別に面白い場面でも何でもないのだが、いつもちゃんと制服を着ている三年生が天才バカボンのような格好で突如出てくると、インパクトがあったようだ。

ともかく僕のクラスの出し物は、観客の大きな拍手とともに無事終わった。僕はヒグチと別れて体育館から出て行こうとしたとき、誰かが僕の右肩を軽く叩いた。

「お疲れさん、すぐよかったよ」

君は自分のことのように嬉しそうだった。

「そう？　でも僕は照明係だし」

「あらっ、照明係だって大切な役割でしょ」

「うん、まあ、そうともいえる」

僕は歩きながら、再び達也の言った言葉が少しずつ頭の中に響いてきた。

「河村君、どうしたの？　疲れた？」

「いや、そうじゃなくて、ちょっと考えごとがあつて」

「文化祭を妨害している犯人のこと？」

「うん、そうだけど」

「ねえねえ、その件について捜査会議しようよ！　会場係として」

君は例のごとく悪戯っぽい瞳を輝かせて提案した。

「そうだなあ、うん」

「じゃあさあ、ここに行かない？　私、食券があるんだ」

君はポケットから黄色い食券を二枚取り出した。『和を極めた喫茶！』と書かれてあるその食券はぜんざい用のもので、香織のクラスが企画運営していた。

（ゲッ！）僕はドーナツは好きだけど、ぜんざいは大の苦手なのだ。あのあんこのような粘りつく甘さが耐えられない。ぜんざいを食べると舌の周辺と頬の奥がむずむずしてきて、その辺りが妙に軽くなるような痒くなるような感覚になりとても気持ちが悪い。

しかし君の表情を見ていると明らかにぜんざいが好物らしく、当然僕は君の誘いを断ることはできなかった。

「犯人は大野君じゃない？」と君は推理した

『和を極めた喫茶！』（しかしなんてセンスのないネーミングだろう）は調理室を会場に使っている。この店もかなり人気があり席はほぼ満席だ。

僕は香織がいないことを願っていたが、運悪く妹は目ざとく僕たちを見つけて空席に案内した。六人掛けテーブルの角の座席が二つ空いていた。僕らは角を挟んで座席についた。

「お客様、食券をお渡してください。なければ、こちらのメニューからお選びください」妹はニヤニヤ笑いながら説明する。失礼な奴だ！

「香織ちゃん。ハイ、これ。ぜんざい二つお願いね」

「ぜんざい二つですね。かしこまりました」

香織は「ぜんざい」のところをやけにアクセントをつけて言った。あいつは僕がぜんざいを大の苦手に行っていることを知っている。だから僕を見て面白くて仕方がないが必死に笑いを我慢している。朝の事件ではあれほど真剣で深刻な顔をしていたくせに、今はそんなことがなかったかのように楽しんでいる。どうしてこんなに簡単に感情のチャンネルを切り替えられるのだろうか？　これだから女の子はわからない。

「はい、どうぞ」

僕の目の前には君が入れてくれたお茶が置いてあった。薄茶色の湯飲みから香ばしい番茶の香りが立ち昇っている。僕はそのお茶をゆっくりと味わって飲む。美味しい！　家で飲むお茶と全然違う。僕がその感慨にふけていると、君はいつものように僕の目を覗きこむように訊いてきた。

「ねっ、ねっ、河村君が考えている犯人像ってどんなのかな？」

「うん、さつき友だちとそのことで話したんだ。犯人はポスターやボランティア部の展示物を破ったけど、文化祭自体を攻撃しているんじゃないのかもしれない」

「ふーん、それってどういうことなの」

「文化祭というイベントがターゲットじゃなくて、文化祭に関わる人間がターゲットだということ」

「でも文化祭に関わる人間って、だいたいみんな関わっているよ」

「うん、これは僕の勝手な推測っていうか勘だけど、犯人は実行委員会をターゲットにしているような気がする」

「えっ、私たち？」君は驚いて目を丸くし、自分の顔を右手で指差した。

「それも実行委員の誰かを」

「でもさ、実行委員会の仕事って地味なことばかりだよ。宣伝物をつくったり、広告をとりに行ったり、パンフレットをつくったり。目立たないし結構大変だし」

君は両腕を組み眉間に皺を寄せてしかめっ面をした。本人はいたって真剣に考えているのだけど、四十五度の角度で対面している僕はその表情の変化が面白い。

「お待たせしましたあ」

僕らの話を割って入るように、香織がぜんざいの入ったおわんをテーブルの上に置いた。

「あつーい、あまーいぜんざいでございます」

妹は僕の顔を見ながら笑いをこらえながらそう言った。

「香織ちゃん、ボランティア部のほうは大丈夫？」

「あつ、ありがとうございます。みんなで書き直したり、展示物を貼り替えたりして、何とかやれそうです」

「そうーっ、よかったねえ」君はそう言いながら、黒いおわんに口をつけた。

「しっかし、どうしてあんなことできるのかなあ。葵先輩！犯人って性格歪んでいると思いませんか？」

「絶対歪んでいる、歪んでる！許せないよ、ねえ。あつ、このぜんざい、すっごく美味しい」

「評判いいんですよ。お兄ちゃんも大好きなぜんざいをたくさん食

べてね」

僕は香織に目で（早くあっちへ行け！）と言った。女子同士の話は脈絡がないし延々と続きそうで怖い。

「それじゃあ、お二人様ごゆっくり」香織は僕の冷たい視線を軽く受け流しテーブルを離れていった。僕は香織が調理場に入って行くのを確認し、意を決し箸をとりぜんざいを口にした。甘ったるい液体が舌を通過した瞬間、僕の腰の辺りからむず痒いような悪寒が背中に這い上がった。

「河村君、寒いのか？」

「えっ、どうして？」

「いまブルツて震えたようだから。それに顔色もあまりよくないようだけど」

「いや大丈夫だよ。ちょっと疲れ気味かもしれないけど」

「そう、大丈夫？」

君はそう言うのと、まだ腕組みをして何事か考えた。そして美味しくそんなにぜんざいを口にふくみよく味わって食道を通過させた。それからお茶を飲むと一息つき、携帯電話をスカートのポケットから取り出した。

「河村君、これ見てくれる」君は若干声をひそめて携帯電話のディスプレイ画面を僕に見せた。

『お前のつきあっている男は変態だ！ レイプ魔だ！ 人殺しだ！』メールの受信ボックスには角ばった無機的な文字でそう書かれていた。僕はびっくりして君を見た。

「昨日の夜遅くに、このメールが届いたの」

「何だよ、これ。ひどい！ 許せない。このメール出した奴はわからない………よね」

僕の頭部に急に大量の血液が流れていくのを感じた。怒る「頭に来る」ということは事実だった。けれども君は意外に冷静だった。

「うん、これはなりすましメールだと思う。知らないメアドだった」「シヨックだった？」

「うっん、メール見たときは驚いたけど、私、こんなの見てもあまり動揺しないタイプなんだ。なんだーあ、こいつ！　って頭にきちゃったけど」

「あれ、このメールは、ひよつとして文化祭を妨害している奴？」

「うん、そう思うでしょ、河村君。私もボランティア部の落書きを見てそう思ったんだ」

ポスターを×印で切り刻み展示物に落書きしメールで中傷した一連の行為の中に、僕らは共通した歪んだ悪意を感じた。

僕はそんなことを考えながら、無意識のうちにぜんざいを口にしてみました。するとまたもや悪寒が全身を駆け巡り一瞬身体が小刻みに震えた。だから急いで湯飲みのお茶を飲み干した。その様子を君は不思議そうにじつと見ていた。

「河村君、ひよつとしたらぜんざい苦手じゃないの？」

「いや、まあ、あまり好きじゃないんだ。実際」

「ホントは大嫌い？」

「そうとも言える」

僕の返事に君はいつものようにクスクス笑い出した。

「ゴメンね、無理に誘って。しかし香織ちゃんもよく言うよね。ねっ、じゃあ河村君のぜんざいも私食べていい？」

「でも、口つけたよ」

「フフッ、いいの、いいの」君はニコニコしている。僕はそんな君を見てみると、女の子の大胆さを感じたりする。

「でもさ、さっきの河村君の話だとさ、犯人がターゲットにしているのは私じゃないかなあ」

「えっ、どうして？」

「だってポスターをつくったのは私と宮田さんだし、ボランティア部も弟との関わりがあるし、嫌がらせのメールは来るし」

「うーん、だけどポスター製作者が秋山さんと宮田さんってこと知っている人間は限られているだろ」僕は思案にくれ、君も数学の難問を解いているような表情を浮かべた。

「だけど、どうして秋山さんのメールアドレスをそいつは知っていたのだろう？ ケータイのメアド、そんなに周りに知らせてないよね」

「うん、ごく親しい人しか知らせてないよ。アッ！」

「うん」君が驚くのと同時に僕も頷いた。

僕らのケータイのメールアドレスは文化祭実行委員会のメンバーは全員把握しているのだ。大野がお互いにすぐ連絡が取れるようにと連絡先の一覧をつくり、そこにはケータイの電話番号とメールアドレスが記されている。（無神経な奴だ！）

そして実行委員会の人間はポスターを描いた人が誰かということに当然知っている。

「ねえねえ、河村君」

君はなぜか身体を丸くして、つまり極端な猫背になって声をひそめて言った。（どうやら縮こまって何者から隠れているつもりらしい？）

「犯人は大野君じゃない？」

「エッ！」

僕の反応に君は人差し指を口元にもっていき「シート」とまたもや声をひそめて辺りを見回した。僕は君がひよつとすると推理小説マニアではないかと疑った。

「だって大野はあれでも実行委員長だよ」

「河村君、犯人はもつとも犯人らしくない人間ってことはよくあるじゃない」

「なるほど」僕は相槌を打ちつつ、君が推理小説マニアもしくはサスペンスドラマファンであることの疑惑をますます深めた。

「それに」

「それに？」僕は話の続きを待っていると、君は急に顔を赤らめた。それから僕を見て何か打ち消すように右手を自分の目の前で小さく振った。

「いや、べつに何でもないわ。ともかく私は大野君が怪しいと思う

んだ」

君はそう結論づけると僕のおわんをとって「エヘッ」と笑った。僕は急須から番茶を自分の湯飲み茶碗と君の湯飲み茶碗に入れながら、大野犯人説を考えた。確かにその可能性はあると思いながらも、頭の隅に釣り針がひっかかっているような違和感は消えなかった。

高校生という生き物

その夜、生徒会室では実行委員会のメンバーが出たり入ったりしていた。

夕方に会議が行われ、今日の状況把握と明日の予定確認がなされた。アクシデントはボランティア部の展示物破損事件だけで、その他の企画は特別問題はなかった。

実は文化祭が始まった時点で実行委員会としてやるべきことはあまりない。ただ実行委員会のメンバーは、仕事がなくてもすぐ帰宅する人間はいなかった。高校生というものは、意味もなくダラダラと友だちと同じ空間にいたがる種族なのだ。

ただし僕と君は会場係として、今日のボランティア部のような事件が起こらないように監視を続けていた。宮田さんや諸星さん、それに他の実行委員もそういった意識を持って動いてくれている。

だけど大野や小杉、藤本たちは明日のステージ出演の最終チェックだと言って、体育館でバンドのリハーサルをしている。僕としては勝手にやってくれと思うが、諸星さんなどは奴らのそんな行動がかなり癢に触るらしい。彼女はコンビ二で買ったクリームパスタを食べながら「大野君たちは自分たちの責任がまったく分かってない！」と怒っていた。

僕たち会場係は午後七時頃に各会場を巡回した。しかしその頃はまだ多くの生徒が残っていて、僕たちの見回りはあまり意味をなさなかった。もともこんな風に「怪しい奴はいないか？」と目を光らせてウロウロしても犯人は見つかるわけではない。まあ僕たち二人にとってはアリバイ的な行動だ。（こんなことでもしていないと、大野や小杉たちがグチグチと嫌味を言うに決まっている）

「お疲れ様」

午後八時過ぎに生徒会室へ戻った僕ら二人のために、諸星さんが熱いコーヒーを入れてくれた。

「ふうー」君はコーヒーを一口飲むと、お腹の底から息を吐き出した。

「河村君、葵、変わったことはなかった？」諸星さんはマイカップにコーヒーを入れながら訊いてきた。

「うん、今のところは変化なし。どこの会場も大丈夫。でもね、雪乃。私は絶対犯人は動くと思うよ、今夜」

諸星さんの問いかけに対し、君はまたもや背中を丸め声をひそめて答えた。

「うんうん、私もそう思う。とくに理由はわからないけど、何となくそんな気がするよね」

諸星さんもなぜか声をひそめて答えた。二人はまるで秘密のアジトでヒソヒソと謀議をはかっているようだ。

「河村君はどう思う？」君はまだミステリーモードで声をひそめている。

「確かにその可能性は高いと思う。でも」

「でも、何？」諸星さんの黒い瞳がクリクリと動く。

「これだけ対象範囲が広いと犯人を見つけるのは困難だ」

「うーん」君と諸星さんは同時に同じ声を上げた。

「だけど犯人像っていうか、こいつは怪しいっていう人間はいないの？二人はこの事件に関して一番情報を持つてるでしょ」

諸星さんは核心を突いてくる。僕は一瞬隣の君を見た。

「それがなかなか思い浮かばないのよ。二人であれこれ考えているのだけど」

君もさすがにここで『大野犯人説』を披露するわけにはいかなかった。やはり推理小説マニアは簡単にネタばらしはしないようだ。

「雪乃、ちよつとこっちに来てくれる？」

メインステージの進行をチェックしていた宮田さんが諸星さんと呼んだ。諸星さんはメインステージの司会者なので、二人で進行の打ち合わせをしている。その休憩中に彼女は僕らのコーヒーをつくってくれたわけだ。彼女たちは台本や進行表を見ながら黄緑色の蛍

光ペンと黒のボールペンでチェックを入れながら、打ち合わせ作業を再開した。

諸星さんが宮田さんの隣に戻ったあと、僕は君に声をひそめて秘密の案を伝えた。それは友人の石川達也と会ってから僕の頭の隅に引っかかっていたことに対する作戦だった。

教室に月あかりが射し込むとき

夜十時を過ぎるとさすがに学校に残っている生徒はほとんどいない。生徒会室に残っているのも実行委員会の主な役職の連中だけだ。
「じゃあ私帰りまーす」

君は生徒会室に残っている大野たちや宮田さん、諸星さんに声をかけた。

「お疲れーっ。河村君、葵をちゃんとまっすぐ送ってあげるのよ」
「ああっ？」

「途中で変なところへ寄り道しちゃダメだぞーっ」諸星さんは僕をからかうことに喜びを感じているらしい。ただ彼女が醸し出すやわらかい雰囲気の中に一瞬、大野が咎めるような視線を僕に投げかけた。

「秋山さんを送ったら、またこっちへ帰ってくるし」

「もういいんじゃない？ 河村君たちはさっきも見回りをしたし」
諸星さんはいろいろ言っても優しいのだ。

「そうね。私たちもそろそろ帰るし、あとは宿直のおじさんに任せたら。ねっ大野君」宮田さんの言葉に大野は黙って頷くだけだった。
「それじゃお先にーっ」

そう言っ僕たちは部屋を出た。それから帰るような振りをして各学年の教室がある校舎へ急いだ。そして静かに三階まで階段を歩いてのぼった。僕たちは君のクラス、つまり3年B組を覗いたが、他のクラスと同様で誰もいなかった。

灯りのついていない教室は暗く、三日月の僅かな光が廊下側の窓を通して射し込んでいただけだった。生徒の学習机を六つほど寄せ集めてつくった臨時テーブルの白いシートが僅かな月明かりをぼんやり反射させている。

「のらない教室って怖いねーっ」君は僕の学生服の袖口を掴みながら、言葉とは裏腹に嬉しそうだ。

「そうかな」僕は平然とそう答えたが、実は暗い場所が好きではない。暗い夜道など歩いていると、ときどき背中に何やら得体の知れないものを感じるときがある。だから一人では夜の教室なんか絶対に入らない。しかし勿論そんなことを今ここで言うわけはいかない。

僕たちは仄かに月明かりが射し込んでいる窓際の椅子に座った。

「秋山さん、本当にこんなに遅くなってもいいの？」

「うん、大丈夫。こんなに遅くなるのは今日が最後だしね。それに弟も自分でできることがかなり増えてきたんだよ」

「そうかあ。でも犯人があの場合に来る確証はないよ。あくまで僕の推測だから」

「うん、それでもいいよ」やはり君の声は夜の闇を怖がってはいない。

「ヒグチの奴、ちゃんと起きているかな」

「いくらヒグチ君でも、隠れている場所では眠れないでしょ」

「いや、あいつは眠る。あいつはどこだって眠ることができるんだ。鈍いというか図太いというか」

「ある意味それって凄いよね」

「確かに、一種の才能かもしれない。けど秋山さんもある意味図太いっていうか強いよね」

「えっ、私もヒグチ君と同じ野人なの？」

「いやいや」僕は慌てて否定した。

「ヒグチとは別な意味で、内面的に強いっていうか、ちゃんとしてるって思うんだ」

「ううん、私は強くないよ」

君の声が明らかにトーンダウンしたので、僕はびっくりした。

「どうしたの？」

「河村君が私のことをすっかりしているって思うのは、私が強いからじゃなくて……私が他人に対して諦めているからだよ」

「えっ？」

僕は君の言っている意味に戸惑い一瞬息が止まってしまった。

君は夜空の高い位置にある三日月をしばらく見上げていた。それから僕を真っ直ぐ見つめた。僅かな月の光の中、君の瞳はとても頼りなげに見えた。

「私の親は私が小さいころ離婚したけど、父さんとはずっと会っていたんだ」

「あつ、う、うん」僕は混乱していた。

「毎年、クリスマスイヴの夜に、父さんと食事してプレゼントをもらうのがすごく楽しみだった」

「・・・・・・」

君は僕の顔から目を離して再び三日月を見上げた。秋の夜空にある三日月の光は儚げで、今にも消え去ってしまいそうだった。

「私が中学三年のときも、クリスマスイヴに父さんとデートした。

その日はとても寒くて粉雪が降っていた。父さんは素敵なレストランで待っていた」

君の声が二人だけの教室に静かに響いた。

「美味しいフランス料理が出てきて、私は嬉しくていっぱいいろんな話をした。父さんは最初いつもように楽しそうに聞いてくれた。

だけど時が経つにつれ、いつもの父さんと違ったような気がしてきた。そして別れる時刻が近づいたとき父さんはやたら緊張して私に言っただ。『今日は葵にどうしても言いたいことがある』って」

いつからか君の声は小さく震えていた。僕はこれまで、こんなに悲しい君の声を聴いたことはなかった。

「私が『えっ、何かな？』って訊くと父さんは少し困った顔で言った。『葵も大きくなったし、今日で父さんと会うことをおしまいにしよう』って。私は驚いて、『それどういこと』って訊くと、父さんは『今度、再婚するんだ』って恥ずかしそうに答えた」

僕はただ黙って君の話を聞くしかなかった。

「私はそのとき悲しいとか淋しいというより、ああ私と父さんの繋がりがって結局そんなもんなんだって思った。そのあと父さんは何か

言つてたけど、私の耳には何も聞こえなかった。目の前の男の人はもう父さんじゃなかった。あのクリスマスイヴの夜、私は何かとても大切なものを無くして、それまでとは違った人間になったんだ」

君は澄んだ瞳ですつと三日月を見上げていた。そして右手で僕の左手を握っていた。君のその右手は冷たかった。僕が途中から両手で包んで暖めようとした。だけどぼくの手のひらにある温もりは君の手には伝わらず、その温もりは何処かへいつてしまった。

「ねえ河村君、大切なものは本当に一瞬で無くなるんだね」

僕は知らない間に涙を流していた。どうしてこんなに涙が溢れるのだろうと思うくらい……。

「ごめんね、変な話をして」

君は僕の方を向き、何かをこらえるように無理やり小さく笑った。「いや、そんなことはない」

僕は涙を拭きながら、それだけしか答えることができなかった。

十月の深く暗い空を流れる雲が三日月を覆った。夜の教室は闇に包まれ、僕たち二人はその闇に同化しているような感覚に陥った。

僕にとってこの世界で確かなものは、君の小さくて冷んやりした右手だけだった。

灰色の雲は流れ続け再び三日月が現れた。その薄い光を浴びた君は、泣き出しそうな少しだけ笑ったような表情を浮かべている。

僕はゆっくりと君の肩を抱いた。

君は僕の胸に顔を埋めた。そして深く熱い息をついた。

いったい僕たちはどれくらいの間、抱きあっていたのだろうか？

夜の教室は深い海の底のように闇に閉ざされ、時折僅かに白い光が射し込む。それを何回か繰り返し、時は静かに進んでいった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6152y/>

受験生だけど恋をした

2011年11月23日10時53分発行